設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 6年 3月16日
(130号)

中之島ニュース

［事務局］ 〒567-0861
茨木市東奈良2-7-10
人間学塾・中之島
事務局 古田修平
編集人 西村俊幸

「禅の教えに学ぶ～仏陀に学ぶ」

横田 南嶺 管長
（二月度特別講義より）

■お釈迦様の誕生の地を訪ねて

今月初めてインドというお釈迦様がお生まれになりお亡くなりになった地を訪ねてまいりました。禅というと達磨大師が初代と言われていますが、同時に達磨様はお釈迦様から二八代目の祖師とも言われます。禅の一番の大本はお釈迦様になるわけです。

お釈迦様がいつ生まれ亡くなられたのかは未だに定まったものがありませんが、おおよそ二五〇〇年ぐらい前のインドの方です。お生まれはルンビニ（現ネパール領）で、迦毗羅(かびら)城の王子としてお生まれになられました。仏教はインドで起こりましたが、インドの八割はヒンズー教・イスラム教で、仏教は一割に満たない。それどころか、インドにおいて仏教は完全に消えていた時代が長かったのです。それゆえお釈迦様の実在さえ疑われた時期もありましたが、これは一九世紀の終りに遺跡の発掘がなされ、歴史上その存在が証明されたのです。

■八相成道

お釈迦様のご生涯を八相成道と言い、八つに分ける考えがあります。まずは天から降りてこられる「降兜率」、お母様（摩耶夫人）のお腹に宿られる「託胎」、お生まれになる「出胎」。そして王子の位を捨て修行に出られる「出家」、修行中の難行苦行、悪魔を断ち切る「降魔」ののちに、ついに悟りを開かれる「成道」。初めてお説法をされたことを「転法輪」と言います。最後に入滅、お亡くなりになる「入涅槃」。大まかに分けるとご誕生、成道悟りを開く、初めての説法、そして涅槃に入るという四つになります。

お釈迦様はお生まれになってすぐに七歩歩まれ、「天上天下唯我独尊」と言われたと言い伝えられていますが、これは周りのインドの神々が後にも先にもないほどの尊いお方がお生まれになったと参拝したということから伝わったようです。ルンビニでお生まれになられ、インドの国は仏教が一時期かなり栄えました。しかし永遠なるものは何一つないとお釈迦様は言い残され、まさしくその通り教えも教団も弟子たちも寺も何もかもインドの国においては滅んで無くなってしまいました。滅んだ原因はいろいろあれど、最後にとどめを刺したのはイスラム軍により寺も仏像も全部破壊され、完全に忘れ去られてしまったのです。一九世紀になってから英の考古学者により、アショカ王により造られた、この地がお釈迦様の誕生の地であるとする石柱が発見されました。その間の六〇〇年間仏跡の全ては土の中に埋もれたままだったのです。この旅でこの石柱を拝むことができ大変感激をいたしました。

お釈迦様は、幼少の頃より争わない、恨まない生き方を求めておられました。ある日田んぼを眺めておられた七歳のお釈迦様の前に土から小さな虫が出てきました。するとその虫を咥えて小鳥が飛び去った、あれよという間に今度はその小鳥は猛禽に狙われてゆく…その弱肉強食の情景を目の当たりにして深く傷つかれたそうです。そうしていたたまれなくなり、林の中の木の下で座禅をなさった。お釈迦様を探しにこられた王様たちは、太陽が移動すれば当然影も動くのに、太陽が動いてもお釈迦様を守るように木陰は動かなかったという奇跡を目したと経典にあります。

■聖なる求め・聖ならぬ求め

世の中には人の求めるものに聖なる求めと聖ならぬ求めがある、とお釈迦様は言われます。人は生まれ、老い、病み、やがて死ぬことを逃れられない。聖ならぬ求めとは、生きている間のさまざまな憂い、悲しみ、穢れなどの中で、それらに執着することは禍であると知らずに生きること。また、若さや健康、財産、名誉などに執着し出離せんと思わないならば、そういう人はいかにどんな安らかさを求めても、結局得ることはない。聖なる求めとは、生まれやがて死を迎えるまで憂いや穢れは尽きないが、それらへの執着を禍と知り、出離しようとするならば、無常安穏のこの上ない安らかな悟りの世界があると。お釈迦様が求めたものは、この世的な栄達や喜び、幸せを求めることとは全く逆の方向であったと言えます。それは結局苦しみからは逃れることはできない。避けることができない苦しみに執着すべきではないことを知ってそこから離れることと気づかれたのです。

お釈迦様が初転法輪で説かれたのは「四諦」です。苦しみの原因と滅亡に至る道であり、「諦」とは諦めるということです。「苦諦」生老病死に伴う苦痛、思い通りにならぬ苦しみ。愛しいものとの別れの苦しみ。憎い人と会わねばならぬ苦しみ。欲しいものが手に入らぬ苦しみ。私たちの心も身体も思うようにはならず、全てみな苦しみである、と説かれました。「集諦」必要以上の欲望や執着は苦しみを生む。「滅諦」その渇愛を滅すること。「道諦」渇愛を滅するための道であり「八正道」として示されました。その八つの道とは①正しい見方②正しい思考③正しい言葉④正しい行い⑤健全な生活⑥正しい努力⑦真理を求める心⑧精神を統一し心を安定させること。お釈迦様の教えは単なる哲学思想ではなく、実践する道なのです。

（抄録　中川千都子）

グループ討議　二月　横田 南嶺 管長

◆Aグループ
・道を求めてきた人を拒んではいけない。
・諸々の事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成させなさい。
・快適に見えるものには気を付ける。

Bグループ
・八正道（正しい実践の道）。
・聖なる求め。
・「立腰」の大切さ。

Cグループ
・立腰。
・八正道。
・執着は禍である。

Dグループ
・八正道。
・快適なものに気を付ける。（立腰）
・実践しないと開かない。

Eグループ
・千人の敵より一人の自分に打ち克つのが真の勝者。
・自灯明　諸々の事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成させる。

人間学塾・中之島　読書会　再開

久しぶりに、人間学塾・中之島での読書会が開催されました。
　Ａ班・Ｂ班に別れ、テキストの輪読、そして印象に残ったところの感想発表を行いました。概要は以下のとおりです。

Ａ班
〇テキスト「ありがとうございます」１～25
〇指導　中川千都子　代表
〇進行　山路直美　世話人
〇参加者　20人

2. 感謝の花を美しく咲かせるためには、まず感謝の根をしっかりと培わなければならないのです。見えない部分に対して、しっかりと感謝を積み重ねてゆくことが、感謝の根を培うことになるのです。

12. 徳を積み重ねる為には、陰徳を積むことが大切です。よいことをしても顕彰されたら、その徳は帳消しになるのです。大臣になって有頂天になっていたら、七代祟るほどの徳を失っていることにも気づかなくなるのです。

14. 思いの中核にあるものは、言葉です。言葉によって、思いを支配することができるのです。すべては言葉の通りに思いの通りに成るのです。言葉を選び、言葉を駆使することによって、自分の思いを自由自在に支配することができるのです。

Ｂ班
〇テキスト　「一語一会」２月
〇指導　近藤宏枝　世話人
〇進行　嶋田泉　世話人
〇参加者　21人

二月二日
　畏友と呼びうる友をもつことは、人生の至楽の一つといってよい。

二月五日
　いやしくも人間と生まれて、多少とも生き甲斐のあるような人生を送るには、自分が天からうけた力の一切を出し尽くして、たとえささやかなりとも、国家社会のために貢献するところがなくてはならぬでしょう。

二月二十六日
　人生は一生のうち逢うべき人には必ず逢える。しかも一瞬早すぎず、一瞬遅すぎない時に一。

※読後感で多かったものの中から抽出して掲載しています。

《寺田先生に導かれて》　近藤 宏枝　⑮

「毒を食らえ」

執行草舟先生を初めて存じ上げる事となったきっかけは、四人の無名有力の方を紹介した『耆(ろう)に学ぶ』（エイチエス発行）の一冊からでした。それは四人のうちの一人として、寺田一清先生が選ばれていましたので購入していたのでした。今から八年程前の事です。

老とは本来、「知恵者」とか「徳の高い人」という意味です。寺田先生と並んでここに紹介されている執行先生に興味を持ち、本文を読み進んでいきました。まずは「毒を食らえ」の言葉には驚きました。執行先生独特の表現で、私達が生きていく上での「毒」とは「艱難辛苦」を意味しています。それを「食らう」事によって私達は、鍛えられていくと書かれています。逃げることなく、それと真摯に向き合って、受け入れていく事が生きる事です。

そして、その本との出合いから三年後、令和元年に「人間学塾・中之島」に講師として、初めてご登壇頂ける喜びに浴するのでした。

その時の演題は「運命を生きる」です。先生が表現される「垂直」が自分の運命を生み出す根源になることを、生の声で拝聴したのでした。それは「水平」の私達を取り巻く周りに振り回されることなく、先人の生き方に学び、自分独自の生き方を覚悟をもって進んでいくことこそが、美しい人生をもたらしてくれると説いて下さいました。

私達がご尊敬申し上げる鍵山秀三郎先生は、執行先生の名著『「憧れ」の思想』を、自分の人生で出合った最高の書物と、絶賛されていました。また昨年出版された『人間の運命』では、森信三先生の「しつけの三原則」を取り上げて下さっています。

今期、再び執行先生のご講演を賜わる喜びを深く噛みしめ、学びたいと思っています。

横田南嶺管長のYouTube第1142回の「管長日記」にて

人間学塾・中之島のことをお話しくださいました。

「人間学塾に集って学ぶ方々は皆それぞれの持ち場で、太陽に向かって精一杯輝いて、一隅を照らしておられる方たちなのであります」

私たち塾生にとって光栄なお言葉をいただきました。

https://m.youtube.com/watch?v=lPv6jG1xtnc

聴講生の皆様へ

本日は人間学塾・中之島へ聴講にお越し頂きありがとうございます。

人間学塾・中之島は、第12期を迎えます。前身の「天分塾」以降、四半世紀にわたり、「念々志学」「念々心願」「念々感謝」のもとに、一流講師陣の講義や先哲・先師に、そして塾生が互いに学びあっています。

詳細につきましては、別途、配布させていただいていますパンフレットをご覧ください。

途中入塾・歓迎します。

《人間学塾・中之島》次月日程

【４月日程】

○日　時　４月13日(土)～14日(日)

○場　所　仁和寺　御室会館

○講師・演題

第一講　石川 真理子　先生

「明恵上人と北条泰時

～武士道に慈悲を説いた人」

第二講　岩田 洋治　先生

「いのちの声を聴く」

四月は宿泊研修です

仁和寺（にんなじ）は、京都市右京区御室大内にある真言宗御室派の総本山の寺院。山号は大内山。本尊は阿弥陀如来。開基（創立者）は宇多天皇。「古都京都の文化財」の構成資産として、世界遺産に登録されている。

＊ウィキペディア　より

編集後記

最近、雑誌などを読む際、まずは編集後記から読むようになってきた。その号のまとめや注目度がうまくまとめられている。なるほどと思うことが多々ある。新聞でいうと一面のコラム的なものをめざしているが…なかなか…産経新聞の産経抄・朝日新聞の天声人語・読売新聞の編集手帳など。この中之島・ニュースでこの編集後記をどれくらいの方が読んで頂けているだろうか。どれだけの方に届けられるだろうか。魅力が不足しているのでは…いやニュース自体が…日々、苦悩をしている。

さて、二月は横田南嶺管長。いつものことながら、笑いを交え、深い教えを教わった。「立腰すると疲れない」なるほどと思いつつ、いつも腰が曲がっている自分に猛反省です。

編集長　西村俊幸

人間学塾・中之島
編集部メールアドレス

原稿等はこちらにお願いします！
事務局とは別です

2012nakanoshima@gmail.com

中之島ニュースは塾生の皆様のためのものです。無断で転載・配布・ＳＮＳ利用などはご遠慮ください。

人間学塾・中之島　編集部